



学校だより

# 園里っ子

須坂市立豊丘小学校  
平成28年10月21日  
文責：渋谷

## 10月10日 豊丘ふれあいまつり ありがとうございます



ミニマラソン

「ふれあいまつり」では、今年も小学生の発表や種目を取り入れていただき、地域と一体となって活動できたことが大変うれいことでした。前日に予定されていたサッカーの試合が当日に延期になったので、子ども達にとって移動で大変忙しかったように思います。その中で保護者の皆さんには、厳しい1日の日程をやり繰りして協力をいただきました。ありがとうございました。

ミニマラソンは、昨年よりは参加者が減ってしまいましたが、それでも大変大勢の児童が参加してくれたので盛り上がりました。子ども達への参加の声掛けのおかげだと思います。6年生の「とよおか未来カンパニー」では、クッキーや団子、子ども達の手づくりのモップや食事ナフキンを販売しました。6年生が小さな会社を作って仕事をし、利益を得る楽しさを実感できたことも、保護者の皆さん、地域の皆さんのおかげです。

月末28日には校内音楽会があります。都合が付きましたらぜひご参観ください。



とよおか未来カンパニー

## 10月の校長講話 ～栗田 定之丞の話～

栗田定之丞（くりた さだのじょう）

今日は、このお侍さんの話をします。今から、ちょうど300年前、秋田県の日本海の海に面した村に生まれた人です。この地方では冬から春にかけて海から吹きつける風で海岸の砂が飛ばされ、毎年大きな被害が出ていました。砂の方付けを怠ると、家々や田畑が砂の中に埋もれてしまいます。家も田畑も埋まっていけばば、引っ越しをしなければいけない。

「どうにかならないか」……と、定之丞は考えていました。どんな木を植えてみても全く育たない。そこで彼は、砂の動くようす知るために、冬の寒い中でも、ムシロをかぶり砂丘で寝ながら砂の飛び方を幾日も観察したそうです。

それから、彼は数年をかけて、栗田方式の植林法「塞向法（さいこうほう）」を考え出しました。それは、風を防ぐために古草履やワラ、カヤを束にして砂に半ば埋めて、そのかげに柳を植える。翌年、柳がつくと、グミの木とハマナスを植える。その次の年は風下にネムを植え、これが根付くと初めてその風下に松の苗を植えるというものです。

定之丞は、二十里（80km）の海岸の砂の丘をなんとかしようと思いましたが、むろん人の手がいります。そこで定之丞は、村々の世話役を訪ねてまわり「タダで働いてくれまいか」と頼んで歩きました。しかし苦勞も空しく「お百姓さんは、忙しいものでございます」と言っでは全て断ら



砂に埋もれていく家



塞向法による植林

れていました。それでも「たのむ」と言いつづけるので、無料（ただ）にもかけたあだ名で「だだ之丞」と呼ばれました。村の人からは「火の病つきて死ねよ」とまで「ののしられた」と古い書物に書かれているそうです。火の病というのは伝染病（熱病）のこと……火の病にでもかかって死にやがれ、というひどい言い方です。しかし定之丞は「気にもしなかった」といいます。定之丞には、はっきりとした目標があったのです。

定之丞は、何年もかけて、一人で少しずつ、このやり方で木を植えていきました。ひたすら植えていったのです。そうして8、9年経った時、それらの植物が皆、勢いよく生えていたのです。砂の上にも植物が生えることを、お役人もお百姓さんも、皆がはっきり知ることとなりました。お百姓さんたちは、タダでつかわれることに納得し、その意味が分かったのです。それから、何年も何十年も、村の人は、このやり方で木を植えて、増やしていきました。

プロジェクターに映っている、現在の「風の松原」は日本で一番大きい松原です。面積は約760ヘクタールで、東京ドーム163個分。いまや700万本の松が植えられています。写真では松原の中から、風力発電の風車もたくさん見られますね。「風の松原」は「21世紀に残したい日本の自然100選」にも選ばれています。

- ・どんなことでも、人の熱意で始まる。
- ・熱意をもって生きる人はカッコいい。
- ・熱意は人の心を動かす。

今日は、栗田 定之丞の話をしました。



現在の能代市（空から）



「風の松原」にある案内看板

## ヤーコンを掘りました

学校に畑を貸して下さっている市川さんが、ご自分の家の畑のヤーコンを掘っていいと言ってくださったので、遠慮もなしに2～4年生がヤーコン掘りをさせていただきました。珍しい野菜で、生でも食べられます。（マヨネーズがほしくなりますが）うまいです。

子ども達は大喜びでした。市川さんには、いつも支援をいただいています。本当に感謝です。

